



高橋余一の「生活絵巻」

08 むしろ



「生活絵巻」には、むしろにまつわる珍しい事柄が描かれています。

二巻の「やたやり」（上の図）では、脱穀作業で手伝いをする子どもがむしろで風をおこし、母親（または姉）がもみとスグタ（稲の細かな葉くず）を風力でより分けている様子が描かれています。

また九巻の「晦日の筵払い」は、当時の習慣としてツケで物を買ひ、夏の盆か冬の年末に精算したことを取り上げ、支払いが済んだ証として、近所に見栄を張りながら合図としてむしろをはいたたがあります。むしろをはたくことは、年末だと支払いを済ませて正月を迎えるというすっきりした気分を表すのもってこの方法だったのかもしれない。

〔時計回りに〕

筵の扇風きから風を送る やたやり 初とすぐたを撰りわける

〔下の図〕

現金収入の關係で生活物資の購入は掛買が多かったので、正月の精算時はシュツとこいたそれに大変な見栄坊なところがあつて晦日の早朝あちこちで筵を払い正月の借りは払ったゾーッと近所への報告の信号を送ったものだ

■ 晦日の筵払い

